

## 愛が生まれた日

代務牧師 齋藤 篤

聖書 ヨハネの手紙一4章16節後半～21節

16 後半:神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。

17:こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。

18:愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。

19:わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。

20:「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。

21:神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

---

私たちは、聖霊なる神がこの世界に降られたことを祝うペンテコステの祭りから、3回目の日曜日を迎えました。そういう意味で言えば、私たちは「聖霊の期節」のなかに、今生かされているということになります。

教会の先人たちは、日々の移ろいのなかで、少しでも神の御業というものを感じることができるよう、一年のカレンダーのなかに、そのことを表現しました。いわゆる「教会暦」と呼ばれるものです。現在、北三教会では、『日々の聖句 ローズンゲン』に示された教会暦を使用しています。「三位一体後第1主日」と書かれているのがそれにあたります。これはドイツのプロテスタント教会で用いられている教会暦によるものです。

一方で、私たちの属する日本基督教団では、ペンテコステから数えて何回目の日曜日かということで、本日は「聖霊降臨節第3主日」というように、この日曜日を表現しています。これは、どちらが正しくてどちらが間違っているというものではありませんし、絶対使用しなければならないということでもありません。教会によっては、今日の日曜日を「6月第2主日」と表現しているところもあるくらいです。

ただ、教会暦を用いるというのは、私たちが信じる、父・子・聖霊なる「三位一体の神」には、それぞれの役割というものがあって、私たちとの関わりにおいて、神が私たちと「ともにいてくださった」というドラマをつくりあげてくださっていて、それが、天地創造のときから現在に至るまで、そして来る神の国の完成に向かって、神のドラマが続いているのを、少しでも私たちが感じることができるよう設けられたものなのだと、そのように受け止めることができるのです。

ある神学者は、このようなことを言いました。「旧約聖書は父なる神の時代、福音書はイエスの時代、そしてペンテコステ以降は『聖霊の時代』なのだ」と。とても分かりやすい表現であると思います。つまり、父なる神、子なるイエス・キリストという神、そして聖霊なる神は、決して切り離されることのないつながりをもって、私たちに関わり、私たちとともにいてくださるということです。そういう意味で言えば、私たちは三位一体の神への信仰を大切にしながらも、この期節は特に「聖霊なる神」のお働きに心を寄せながら、与えら

れた日々を生きることができるのです。

ですから、私たちは「聖霊なる神の働き」というものが、どういうところにあるのかを、聖書からより深く理解することが必要ですし、聖霊の働きを知るということはすなわち、父なる神と子なるイエス・キリストのお働きをも知るといことにつながっていく、ということなのです。逆を言えば、父なる神、そして父の御心を忠実かつ完璧に果たされたイエスの言動に基づかない聖霊の働きというものはありません。

では、聖霊に込められた父子なる神の中心にあるものは一体なんなのでしょう。そのことが、本日与えられました新約聖書・ヨハネの手紙第一に、非常に端的かつ明快に記されていますので、それらの言葉から神の中心というものを味わってまいりたいと思います。

## 神は愛です

おそらく、この言葉は最も有名な聖書の言葉として、多くの教会やクリスチャンに用いられるものであるかもしれません。「神は『愛』である」。これは、キリスト教という宗教が大切に続けてきたものが何かというものを、ひとことで表現したものであると言えるでしょう。まさに、神の中心にあるもの、それは「愛」であるということです。

では、その愛とは何なのでしょう。私たちが用いる日本語では、愛という漢字ひと文字で表現しますが、その意味は大変多様であることを知っています。友愛、家族愛、親愛という意味で愛が用いられることもあれば、偏愛、自己愛、執着する愛という意味でも「愛」という言葉が用いられるのを私たちは知っています。

では、聖書で語られている愛とは、どのような意味があるのでしょうか。すでにご存知の方も多くおられるかもしれませんが、本日与えられた新約聖書においては、ギリシア語の「アガペー (ἀγάπη)」という言葉が用いられています。このアガペーという愛は、「自分のことは差し置いて、他者のために尽くす愛」という意味があります。つまり、「神は愛です」という言葉には、私たちの神が自分のことを差し置いてでも、私たちのためにご自分の愛を注いでくださる方なのだということ、深い意味が込められているのです。

今から約500年前、ポルトガルやスペインから、カトリック教会の宣教師たちが日本へやって来ました。彼ら宣教師たちは、日本人に神の愛というものを伝えようとしますが、さっそく伝えることの「壁」を、彼らは経験することになります。それは、「どのように『神の愛』を伝えれば良いだろうか」というものでした。

当時の日本において、それは現在でもそうかもしれませんが、日本人にとって「カミ(神)」とは、火の神、水の神、八幡様やお稲荷さんといった、いわゆる「八百万(やおよろず)の神」のことであり、いわゆる「一神教」と言われる、ただひとりの神という概念が、根本的なところからなかったということ。そして、もうひとつは、「愛」と漢字は、他者のために尽くす愛という意味では用いられていなかったということがありました。愛という漢字は、独占欲のようなものを表現するときに用いられるものでした。今でも「愛でる」という言葉が用いられているところに、その名残があるのです。

宣教師たちは悩みました。どうすれば、神の愛・アガペーを日本人へ伝えることができるか。そうして、彼らはひとつの結論に達しました。神の愛とは「御親さまの御大切(おんおやさまのごたいせつ)」であると。つまり、慈しみをもって親が子を大切に見守り、育てるように、神は私たち人間を、自分のことを差し置いてでも「大切」にしてくださる御方なのだ。これによって、人々に神の愛を誤解なく伝えることができました。

神は私たちのことを、慈しみをともないながら大切にしてくださる。そして、16節の言葉にもありますように、私たちの内に、その愛をもって「とどまってくさる」というのです。たった1節になかに「とどまる」という言葉が3度も用いられているのです。大変興味深いことと言えるでしょう。

私たちは、神が私たちの内にとどまってくださるということについて、ある物語を思い起こすことができます。かつてイエスが、誰からも嫌われていた徴税人ザアカイに向かって言われた「あの言葉」です。イエスはザアカイにこのように言われました。

ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。  
(ルカによる福音書19章5節)

自分自身の悪行三昧のために、誰からも愛されていなかったザアカイにとって、イエスが自分の名前を呼び、それだけでなく「あなたの家に泊まりたい」と言ってくれた。この言葉にザアカイは感激します。自分が大切にされていることを知ったのです。ザアカイはこれまでの生き方を改めて、不当に巻き上げていた金銭を数倍にして返すことを宣言しました。まさに、アガペーの愛がザアカイの心に浸みこんだ出来事であると言えるでしょう。

実は、イエスが言われた「泊まりたい」という言葉は、今日の聖書の言葉にもある「とどまる」という言葉と、同じギリシア語が用いられています。つまり、イエスがザアカイの家に泊まりたいと言われたのは、単に宿として用いたいということ以上の意味が含まれていたということになります。あなたの心に私の愛をとどまらせたいという、イエスのザアカイに対する慈しみであり、親心そのものだったのです。

先週の礼拝で、朗子牧師が聖霊について、それは「親心である」ということを説明していました。つまり、聖霊なる神の働きとは、まさに、御親さまのご大切という親心が、私たちの心にとどまることによってなされる、私たちの内から起こる明らかな変化というものを指し示していると断言できるのです。

本日の聖書の言葉では、そのことについて、神の愛が私たちのうちに全うされているがゆえに、私たちは「イエスのようになる」(17節)と手紙につづられているのがわかります。イエスのようになるとは、私たちがイエスのように万能になるということではなく、イエスが示された愛が、私たちの心にとどまることによって、私自身のうちに、私たちのあいだに、神の愛が宿り、神の愛が生み出されるということを意味します。

この世にあって、つまり、さまざまな愛のかたちがこの世界に存在するなかであって、ただ神の愛が生み出されることによって、他者のために働く愛がこの世を満たし、神が望まれる平和な世界が生み出されるということです。この世界で神の愛が満たされることが、神の切なる願いだからこそ、私たちの世界に救い主イエスが遣わされて、十字架と復活によってその愛が果たされ、さらに、その愛が私たちのうちにとどまり、満たされ、世界に向けて生み出されるべく、聖霊があますところなく注がれたということなのです。

19節から21節の言葉に注目したいと思います。こう手紙には綴られています。

わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

私たちが聖霊なる神の助けのもとに生きているというのは、私たちもまた、神が示されたご自分の愛を受け取った者として、このアガペーの愛に徹底して生きるということです。これは、イエスが最も重要な掟として弟子たちに示された「神を愛し、隣人を愛する」ということに相通じます。

しかし、このことを実践するのは、私たちにとって実に大きなチャレンジと言えるでしょう。私たちは根本的に、自分のことを差し置いて、人を大切にすることは、本当に難しいのです。何かの利害関係によって、私自身が傷つくのを恐れて、その範囲内で回りをキョロキョロと見渡ししながら、非常に限られたところ

で、矮小化された愛を実践しようとする私たちが存在していることも確かです。そういう意味では、今日の聖書の言葉の18節にもありますように、私たちは恐れというものを抱きながら、神の愛をとらえることの難しさというものを意識・無意識の別にかかわらず、感じ取っているのかもしれませんが。

だからこそ、私たちには聖霊なる神の慰めと励まし、慰めを必要とするのでしょう。聖霊なる神は実に大胆なかたちで、私たちのうちに神の愛をもたらしてください。そして、恐れを打ち砕く大きな力があることを、私たちは恐れる者だからこそ、聖霊のお働きというものを信じて、神の期待というものを前向きに受け止めてまいりたいと願います。そこに「愛が生まれる日」が訪れることを、心から望みつつです。

---

## 祈り

聖霊を私たちにあたえてくださった神よ。私たちは恐れます。まことに恐れます。しかし、あなたが私たちの心にご自分の愛をとどまらせてくださり、聖霊の力をもって、私たちからあなたの愛が生み出されることを心から願い、期待し、あなたにその助けを求めます。

どうかこの世界が、あなたの愛で満たされますように。そのために、私たちをその道具としてお用ください。

愛の主、イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。